エッセンシャル・ワークとブルシット・ジョブ

田中　史郎

あれから 10 年が経つが、先日（2 月 13 日）の大きな揺れが「3.11」の余震だということを聞かされ、大震災が終わっていないことを思い知らされた。また、昨年から続く「コロナ」収束の兆しも見えない。この間を通じて、われわれの日常生活や大きくいえば資本主義というものが問い直されてきたことは周知のことであろう。そうした中にあって、あらゆる社会の基盤となる労働にかんしても同様であろう。エッセンシャル・ワークとブルシット・ジョブをキーワードとして考えてみたい。

災害や感染症の蔓延など、困難な状況のときに指摘されるのが、エッセンシャル・ワークの重要性である。エッセンシャル・ワークとは、医療や介護はもとより、生活インフラ、交通・通信、生活必需品の販売、そしてゴミの収集など、日常生活を送るために欠かせない仕事をさす。そしてこれらの仕事は、対面や現業が多い。デジタル化が進み、効率化が求められても、それには乗りにくい業種や職種であるとともに、一部を除いて、低賃金であることがしばしば指摘されている。

こうした労働の対極に、ブルシット・ジョブがある。それは、D.グレーバー（酒井隆史・芳賀達彦・森田和樹、訳）『ブルシット・ジョブ』（岩波書店、2020 年）によって命名されたものだ。bullshit とは、「戯言」や「デタラメ」などの意味をもつが、訳者はこれに、「クソどうでもいい」という日本語を与えている。著者はそれを「取り巻き、脅し屋、尻ぬぐい、書類穴埋め人、タスクマスター」などとやや抽象的に定義しているが、日本に例を求めれば、企業顧問弁護士、金融や不動産のコンサルタント、一部の議員や公務員、お飾りの受付係、広告作成者、高級マンションの門番などが思い当たる。あるいは、官僚の天下りなどは、それがブルシット・ジョブであるがゆえに可能なのである。そして、これらの職は、場合によっては高給であるものの、実のところ、本人でさえ無意味で不必要だと思っているとのこと。

一方で多くのエッセンシャル・ワークの低賃金と、他方である種のブルシット・ジョブの高給は、いずれも資本主義のメカニズムから生じたものである。資本主義や市場経済は、自由な契約を通じて効用が価格に反映される筈であるとされているが、それは単なる建前であって、実態はかけ離れている。エッセンシャル・ワークとブルシット・ジョブとの対比はそれを炙り出す。この 10 年を通じて、労働の意味や意義を考えた人は多いのではないか。

（『センダードつうしん』第 3 号、2021 年 3 月）